

飾り壺

寄贈／匿名

爆心地から約 1600m 土手町（現在の稲荷町）

寄贈者(5 歳)は、倒壊した自宅の下敷になった。母や姉とどうにか抜け出したが、3 歳の妹は見つからず、迫る火になす術はなくそのまま逃げるしかなかった。

家は焼き尽くされ、4 日後、家族を捜して避難先へやってきた父の腕には、妹の遺骨と、奇跡的に無事だったこの壺が抱えられていた。

寄贈者のお話から

「私も姉もひどいケガを負っていました。裸足の足の裏に、焼けたアスファルトがものすごく熱かったことは今でも忘れません。頭の切り傷にはなかなか毛が生えず、子ども心にとっても辛いものでした。

被爆前、いつも床の間に飾ってあったこの壺は、あの日私と同じ部屋で被爆し、今日まで大切にしてきました。」

